

## 「日本学」の対象と方法

## ——将来に向けての一考察——

ヴイム・ボート

日本研究の対象である日本が存続する限り、日本研究も存続するのであろう。いや、ギリシア、ローマ、中近東の古代の文明の例を思い起こせば、たとえ日本が亡びても、その遺物と文献の研究は人類がある限り、存続することは確実だ。だから、「日本研究の将来」を案じる場合、存続とは違うことが問題になるのであろう。その問題は、方法論や学術性や専門分野選別や教育や国際交流や財源などと係わっているものではないだろうか、と筆者は一応問題を整理する。以下、この諸側面を取り上げて論じていきたいと思っている。

## 方法論

「日本研究」はそもそも「日本」のなかで残った遺物（無形な風

俗等も入れて）と文献を研究することだ。つまり、「日本」という有意義な単位が存在していることを前提にして、この遺物と文献をその単位の表現として研究することが出来る、という信念が下支えをしているわけだ。さて、誰にでも分かるように、「日本」は取りあえず地理的な概念である。弥生時代から明治時代まで、日本列島で統一した文明があつたわけでもなければ、統一した政権もなかった。大和王朝とそれに継続する武士の政権は千年をかけてやっと本州・四国・九州の三島をその支配下に入れて、明治時代になつてから北海道と沖縄がそれに加わり、今にいう「日本」が成立した。（一時合併した朝鮮と台湾と千島列島・樺太のことはもう言及せずに忘れておこう。）

明治時代に日本で国民国家が成立したので、やはり学者が皆その

責任を直感して国史の一律性、当然性を強調し、地方の違いを無視して国民の統一性を前提にして日本史を語ろうとしたのである。この点、日本は例外ではなく、十九世紀なら、これはむしろ普通だった。筆者の生まれ育ったオランダを例に挙げても、全く同じことだ。一五七九年から一七九五年にフランス軍に占領されるまで、オランダは独立して主権を持つ七つの州 (Provinces) からなっており、軍事・外交の面では幾分か協力しつつ、各州の代表が定期的に集まる会議を最高機関にして、しかも、協力機構として他の二つの州を占領地として支配していたという、複雑極まる仕掛けだった。一八一三年、ナポレオンが破れて独立して、王国として生まれ変わって以来、文学者も歴史学者も言語学者も揃ってこの過去を否定して、統一したオランダ国民、統一したオランダ国家を讃えてきた。州こそ、フランス時代に一時廃止されたものの、復活して相変わらずオランダの地理の基礎になっており、つまり、廃藩置県は試みられたものの成功しなかったのは州の強さを示す。しかし、他の面では統一作業が続いた。十九世紀前半に相次ぐ憲法改正を通じて中央権力がますます強くなって、州の権力が薄らいできた。

オランダの中にはいろいろな方言だけでなく、別の言語であるフリシア語でもあるが、それは学校では教えられず、フリシア州の中でさえ第二国語として教わるのが可能であるだけだ。学校で教える国史は言ってみれば、七つの州の中で一番実力があつたオラン

ダ州の歴史である。標準語は同じくオランダ州のハールレム市の方言に基づいて、十九世紀中に作られてきた。

オランダは行政単位としての歴史は精々十五世紀にしか遡らないのに、或る歴史学者はローマ時代以前にすでに「オランダ人」が存在して、そして川や堤防や干拓地を操っていたかのように、その「国民性」を論じようとする。これも無理だと分かったので、主な歴史学者は、十六〜十七世紀、オランダの「黄金時代」を国家と国民が誕生した時代に指定して、それを祝うようになった。その神殿とでもいえるのはアムステルダム国立博物館（今の建物は一八八五年に建設なのだ。似たような経緯がヨーロッパの国々（イギリス、フランス、イタリア、ドイツ）でも早かれ遅かれ見られるのは、明治時代の日本は必ずしも例外ではなかったことを証明する。ただし、国民国家を作るのは学術的な営みではなく政治的な営みである。換言すれば、「日本研究」をするのには、手始めに「日本」は意図的に構成された概念であることを自覚しなければならぬ。相変わらず、日本でもオランダでも地方史学者は見下ろされているのだが、適切ではない。その研究の質はともかくとしてその意図は大事にしなければならない。外国人も隅に置けない。違う伝統で育った以上、着眼するところが違うからだ。端的な証拠は、日本の方言の研究が上智大学のベルギー人の神父によって始められたことである<sup>1)</sup>。主流の言語学者は標準語を作ることに精一杯で、方言など

は二の次だった。ましてや、アイヌ語とか沖繩の言語をや。

戦後の今、「日本」といえば、実は二つの基本的に違う定義を相混せているのだ。一つは日本列島で、もう一つは大和王国以来の中央政権が段々と拡大して、迂曲しながら出来上がった国家である。一つは地理的概念で、もう一つは歴史的概念である。今、たまたま重複していても過去には（正確に言うと沖繩返還までは）列島の或る部分は政権の範囲外に置かれていたか、政権の範囲が今の列島を遥かに上回っていた。地理的な「日本」には北海道も沖繩も各地方の特色も当然入っているが、中央政権下に入れられるまで歴史的な「日本」ではなかった。だから、時代や研究テーマによって、その研究に妥当な単位である「日本」を定義せねばならないのだ。

地方の特徴と地方別の文化だけでなく、海外との繋がりも見落とされがちだ。縄文時代はいざ知らず、せめて弥生文化の担い手が九州に上陸して、九州から本州に広まっていく時から、大陸、就中、朝鮮半島との繋がりをはつきりしている。拡大する漢朝の中国の影響も加われればいっそう大陸を計算外に置くのは最早、誤りであることは明解な事実だ。しかし、日本研究において、この認識がどれだけ浸透しているか、分野によって違う。仏教の研究なら、大陸の出来事を無視してはならないのはむしろ常識だろうが、神道の研究では全く視野に入っていないようだ。なのに、仏教以前の大陸の宗教と神道の類似点、例えば、自然（山、川）の崇拜や偶像を立てない

ことは示唆的だと思われないでもない。

分野は違うが、国文学なら漢文が無視されがちだった。つい最近、日野龍夫（一九四〇―二〇〇三）の努力のおかげでやつと国文学者の視野に入ったが、それまでは、日本語でないから日本文学ではない、だから、研究しない、という態度が支配的だった。そのために、日本人が書いた文献の半分以上が完全にシャットアウトされた。これも、日本独特のことではなく、全く同じ理屈で、ヨーロッパの中世、近世にラテン語で書かれた文学が各国の国文学とは見なされず殆ど研究されていないのだ。されるところでも、各国の国語の文学と融合して研究されることはまずない。しかし、考えてみれば解るように、日本の文明は東アジア文明圏に属してその芯である中国文明のテーマの編曲だ。だから、日本の文学だけではなく、その歴史、宗教、法制、建築、音楽、食生活等々までも、研究するにあたって、大陸との繋がりを常々念頭に置いておかねばならない。なお、近現代になると、中国の代わりに西洋、特にイギリス、ドイツ、アメリカの影響が強くなり、それも忘れてはならない。そうしないと、日本列島に現存している遺物と文献を正しく理解することはできない。結論として、方法論の見出しの下では「日本」という概念の相対性を明白に自覚し、そして、どんな物とか文献とかを研究しているも、その大陸の文明または西洋の文明との繋がりを見失わないことが大切だ。

学術性

次に問題になるのは研究の学術性である。つまり、右に描写したのは何よりも所謂「地域研究」に通っているアプローチだ。しかし、地域研究は評判が良くなく、その学術性も問われている。理屈は様々だが、「地域研究」が“area studies”または“Orientalism”の意義で、半世紀以上批判されてきていることは事実だ。批判の嚆矢を射たのはアブデル・マレクというエジプト人の社会学者であるらしい。彼は一九六三年にフランスの学術雑誌に出した論文で、次の点を批判的として取り上げたが、後ほど現われた、世界的に流行ったサイドの批判も実はこの枠を出ない。指摘するところは、西洋人の学者は「オリエント」の民族を研究の対象としか見なさず、基本的、否、性来的に西洋人と違うものと思ひ込み、勝手にその「他者」の絵を描いて、無理矢理に当てはめようとする、東方学者は植民地主義の手先で、植民地支配体制に協力していること、しかも、研究する地域は昔こそ文明が栄えたが、今は衰えてきているので、現代の社会等々は研究に値しないと思うこと、現地の学者とは協力しようともしないこと、などといったもので、西洋の東方学者は皆こうだから駄目だ、という結論に辿り着く。

日本の場合、地域研究の批判との関係において必ず持ち出される

のは『菊と刀』だ。なるほど、日本人を他者と見なして協力させずに勝手に絵を描いて、しかも、帝国主義的政策に迎合している点では批判が当てはまる。結論として日本は「恥の文化」で、西洋の「罪の文化」に劣っているということも思う壺だったろう。しかし、だからと言って、地域研究がだめだとは結論できない。著者のルー・ベネディクト (Ruth Benedict, 1887-1948) は日本学者ではなく、日本語もできず日本のことも知らず調査に掛かった。戦時中、アメリカで収容所に入れられた日系の住民や捕虜を調査の対象にして、比較文化人類学の説を駆使し、終戦後の日本人の心理を占おうとしていたわけなので、もともと瑕疵がある研究であった。だから、間もなく反論も出るようになった。

こんな、むしろ道徳的とも言える地域研究の批判より致命的になりうるのは学科 (discipline) ではないから非学術的であるという批判だ。例えば、「日本学」は日本の地理も言語も歴史も文化も含めており、奈良時代の宮廷文学から今の霞ヶ関の政治まで、全部をその領域と見なしている。しかし、どの分野においても普遍的な価値がある「説」(仮説、法則)を立てることに成功しないので、自立した学問ではなく精々「説」を成立させるための事実 (facts/data) を集める役だけだ。

一目してこの批判は説得性がないでもないが、もうちょっと考えてみよう。その「説・法則」を立てる「学科」というのは一体何で

あろうか。経済学、政治学、社会学、比較文化人類学、言語学、歴史学などであることが解ってくれば、やはり考えが変わる。文化人類学を除いて、他の学科は全部、西ヨーロッパないしはアメリカのことを研究して集めた事実に基づいており、それらを幾分か抽象化して「説」に仕上げる習わしだ。そういうわけならば、日本の経済とか政治を研究して「説」を立てることも許さるべきであろう。

なるほど、経済学や社会学は自然科学に憧れて、数学を駆使して如何にも自然科学らしく構えているし、二世紀弱の間にいろいろな研究成果が蓄積してきているのだが、しかし実態をみれば、狙っている（普遍的、必然的は）「法則」性にはまだほど遠い。問題はデータ群の一つによつて立てた「説」が必ずしも別なデータ群に当て嵌まるとは決まっていな<sup>い</sup>ことだ。

「学科」の説が西洋本意であることを何より示すものは、「歴史に発展あり」という考え方だ。ヘーゲルやマルクスの歴史論をやつと葬つたかと思えば、今度は「モダニティ」(modernity)という形で生まれ変わつてきているのだ。一切の国家または文化が「近代」になろうとしているので、一番「モダン」である西洋は手本ならびに憧れの的になっていると同時に、各国が必然的に達する将来でもある、という考え方だ。日本でも終戦後アメリカの日本学者が、マルクス主義に代わるものの積もりで広めようとした「近代化論」がこの傾向の早い一例だ。しかし、「モダン」というのは具体的に何で

あろうかと聞けば、勝手放題だ。原則として、今の西ヨーロッパまたは合衆国で自分の好んでいる要素を撰んで、「モダン」は民主主義だとか国民国家だとか労働組合があることだとか報道の自由とか自由貿易だとか、勝手に決めるのである。そして、これは歴史の必然的な成り行きなので、皆これに付いてきなさい、と言わなければならぬ説だ。

こんな説を倒すには地域研究が大いに役に立つ。同じ人間だから、この人間が構成するどんな社会の中でも、似た要素、自分の生きていく環境から見識があると思われる要素があることは確かだが、しかし、その要素の組み立ての様子、その配列が基本的に違うことは大いにあり得る。いや、むしろ、ある筈だ。例えば、殆どの国家に今や憲法があるが、美しい日本の憲法、オランダ王国の憲法、シリアにおける憲法、憲法がないイギリスの「constitution」は全然別な代物であり、絡んでいる政治も全然違う。各国（と各時代）の制限を越えて抽象的な憲法を論じることがあり得ない。こんなことを悟らせるには地域研究が一番だ。

もう一つの問題は、この「モダニティへの進歩」が実現せらるべき単位である。今では世界の殆どの土地とかなりの部分の海洋は、ある「国家」が支配する「領域」となっている。樂觀的な図式ではこの国家が全部「国家」√「国民国家」√「民衆主義的国民国家」の、西ヨーロッパ的な経路を辿っていくことになる。しかし、九〇



年代のユーゴスラヴィアの紛争や今の東アフリカ、中近東の紛争が示すように、国家から国民国家になる過程で、少数民族の追放、殲滅さえが起こる。結果として国家が崩壊して分離することもある。チエコスロヴァキアは二つの国に、ユーゴスラヴィアは六つの国に、ソ連は無数の国に分離してしまい、スーダンも二つに分かれたのにまだ内乱が続いている。世界的な規模では国家の成立過程がまだまだ完結していない。必ず完結すると思うこと自体、西洋の先入観だ。図式そのもの、つまり、「言語Ⅱ民族Ⅱ独立した国民国家」に大いに無理がある。地域研究が示すのは、生存可能な共同体が「国家」以外にもあり、「国家」は当然の研究単位ではないということだ。宗教、職業、種族も共同体の絆になり得るし、こんな共同体が国境を越える例もいくらでもある。だから、「国家」に拘らずに、個々の研究に妥当で、もつと広い（あるいはもつと狭い）単位で考えることが肝要である。

モダニティは間違つた学説のほんの一例だが、総じて言えるのは、人文学の領域では、抽象的な説よりは、具体的な問題を見出してそれを調べて客観たるデータでもつて解決しようとする方が適切な方法ということだ。定説の下請けになり、ある学科の捧持者になって、「世界は皆同じだ」という方針を支持することになってはならない。要素は同じであるとしても、その配列が場所と時代によって、いつも違う。だから、現存する「国家」よりは文明と歴史を共有してお

り、類似点の多い地域を撰んで、その枠内で調査して研究を進めることこそ、有意義な研究になるのであろう。

#### 専門分野の選択

ある時点で、学者として自分の専攻を決めなければならない。大抵の場合、「決める」というよりは「ついそうなった」というところだろう。大抵の学生は、日本学を目指すのは日本のある側面に惹かれていくからであり、それを研究分野にしたがるのは自然的な成り行きだ。卒論あたりまではそれで良いが、このハードルを越えてから考えなければならぬ。筆者の意見では何より重要なのは資料の状況だ。つまり、資料がどれだけあるか、そして、アクセスできるか、という二つだ。例えば、古代文学なら、資料が限られており、研究ばかり多い。新味がある研究は仲々できない状態だ。逆に、筆者の専門の近世思想史・文学なら、資料が豊富に残っており、既成の学問は（割合）少ない。なお、資料があつてもばらばらと各地のお寺や倉に仕舞つてあるのも困る。日本に住んでいて十分に時間をかければ全部を歩き回るのは不可能でもないが、筆者のように外国に住んでいれば多くの一次資料を見なければならぬ研究を諦めたほうがよい。アクセスと言えばインターネットが重要な役割を演じて得ることは当然で、幸い生な資料集もネットに出るようになってお

り、本当に助かる。

その次に、資料と研究を読む段階になる。同時に進めるのは得策と思う。資料ばかり読んでいけば、海に沈むという感じになるし、研究ばかり読んだら諸先生の説を相対化することはできなくなる。なお、欧米の研究も無視してはならない。欧米の学者も一七〇年このかた日本のことを勉強してきたし、その結果を認めてもらいたい。もちろん、外国語を読まざるを得ないはめになる日本人の研究者にとつては大変な苦労だとは分かっているが、頭から造詣はないだろうとも言えないし、翻訳も重要だ。日本語の現代語訳でさえ誤摩化し得ることは英語やドイツ語などに翻訳するとはつきりせねばならないところがある。こう思つたら翻訳も注釈の一種だ。

自分の撰んだ専門分野に並行している研究（アフリカの文化人類学とかヨーロッパの古代・中世文学とかソ連の政治学とかの研究）も念のために目を通したほうがよい。「なるほど、こんな研究方法もあるのか」とか「こんな現象があるなら日本でも似たものがあるであろうか」とか、示唆になることは大いにあり得る。筆者に言わせれば、これがいわゆる「普遍的な学説」の真の価値だ。マルクスの説は間違いだつたが、経済史も研究すべきだという指摘は何よりの貢献だつた。

なお、自分の研究結果を国際的な場で説明するのであれば、海外に類似点があることを知っておくべきだ。単なる類似点であるか、

基本的に同じ現象であるか、後者の場合、それが収まっている、より大きい枠組みにおける配列ないしは位置付けはどうか、などを弁えていなければ、日本のことを知らない聴衆に説明することも不可能だ。

もう一つ重要なのは、専門を決める時に、今の大学の学科の区分の犠牲にならないことだ。筆者の専門は「日本近世思想史」であるが、こういう講座はどこにも存在しない。哲学、印哲、倫理、日本文学、美術、日本史、海外交流史、宗教史、下手をすれば、法制史までも入ってしまうから、煩雑なようだ。しかし、江戸時代の知識人の立場に立つてみれば、その統一性が分かる。知識人になろうと思えばまずは古典中国語（文言）を覚えて四書や唐詩の一般知識を身に付けなければならなかつた。これは基本的なカリキュラムだつた。これを終えてから漢学か医学か蘭学を撰んで、その原典の通読、解釈、翻訳、抜粹、応用という義務を負うわけだつた。それに合う社会的地位というと、医者または藩校か塾の先生、または大名か幕府の顧問というものだつた。暇があれば、漢詩か和歌（連歌・俳句も可）を詠じたり、文人画を書いたり、書道に腕を試したりしても差し支えはなかつた。ただし、あくまでも趣味にとどめ、そのどれかの道の専門家になつてはいけなかつた。境は多分、文人画と大和絵との間、つまり、知識人と工芸人との間にあつたのであろう。とは言ふものの、これらの道を専門的に教える人とは付き

合つてもよかつた。なお、日本に生まれた以上、神道と仏教の一般知識を有していた。国学者になれば神道の知識を深めて、儒者が廃仏論者に身構えをしたければ仏教の知識を深めるのであつた。つまり、それぞれの活躍の間に有機的な関係が存在していた。現代の大学の構成に反影されていないのは残念だが、それに束縛されてはならない。

同時代のヨーロッパの知識人に比べたら、要素の配列の異同が顕われてくる。漢文に相当するのはラテン語だつた。ラテン語ができないと、知識人ではなかつた。ただし、ラテン語だけでは足りなかつた。外にギリシア語も覚えるべきだつた。フランス語も一応マスターしなければならなかつた。東アジアで第二外国語を覚えてはならなかつたのは哀れな蘭学者だけだつた。ヨーロッパの知識人は原則として大学という、東アジアに存在しなかつた機関に入り、卒業してから牧師・神父か医者か法学者（判事、弁護士、公証人）になる。あるいは、教師として大学に残つて、以上の科目または教養部の科目である数学、哲学、自然科学を教えるようになった。ヨーロッパでは知識人に許された趣味というと、文学（特にラテン語の詩）または数学と自然科学であつた。クロツキと水彩画は許容される範囲内だったが、油絵は芸人の仕事で、知識人はしない。書道はなく、その書体で有名になつた知識人はいない。つまり、類似点もあるが、大学という機関、法学者の職業、数学、哲学、自然科学

学、習字の位置付けなどの違いもはつきりしている。<sup>①</sup>

## 教育

ある地域を研究するのに必要な条件は三つある。その地域の言語が出来、その地域の一般知識を獲得しており、その地域の住民へ或る程度の共感があることだ。その条件を満たしてしまえば、テーマを決めて研究に励むことが出来る。これは可能であり、そして、事実上どんなふうに運ばれるかを示すのに、少々の自慢話をさせていただくことにしよう。

筆者が高校時代に東アジアの研究に惹かれる切つ掛けになつたのは、たまたま両親の蔵書のなかに林語堂（一八九五—一九七六）とファン・ギューリック（R. H. van Gulik, 1910—1967）の本があつたことだ。林語堂というのは両世界大戦の間、欧米では中国の「中国たる」ところを説明する英文のエッセー（蘭訳もあり）でかなりの人気を博していた文人である。後者のファン・ギューリックはオランダ人の外交官兼東方学者で、戦前は東京に、戦時中は重慶に駐在し、最後の任地はまた東京だつたが、人気を博したのは執筆した「荻公案」(Judge De Mysteries)の一連の推理小説のためであつた。その書物を読みながら感じたのは西洋文化と東洋文化の違いだつた。通つていた高校の種類はギムナジウムという、大学予備校のようなもので、



ヨーロッパの言葉の主たるもの（ラテン語、ギリシア語、英仏独、蘭）を習わされてその文学と思想は大分解かっているつもりだったので、大学に入ったら「違う」ことがやりたかったのだ。単なるエキゾティシズムではなかった。ヨーロッパの哲学、文学に匹敵する、しかし、その様相や構成においてヨーロッパの文明と基本的に違う文化を求めていた。候補者のリストは余り長くなく、古代中近東もアラビアもインドも載っていたが、林語堂とファン・ギュリックとの付き合いがあったため、東アジアに一番に共感を覚えたからそれに決めた。

何故、日本語を専門に撰んだかという点、一九六〇年代半ばごろには中国に行けそうになかったからだ。たとえ、行けるとしても誰も行きたくない。毛沢東がそのころ流行り出したのは確かだが、彼に惹かれて中国に行きたがる人は稀だった。代わりに、日本は奨学金などがあつて簡単に行ける国だったし、調べてみれば、結構良い現代文学もあれば結構良い映画も作っていたことが分かった。当時ライデンの民族学博物館の学芸員で、後にチューリヒ大学の日本学教授になったアウエハント（C. Ouwéhand, 1920-1996）が三島、川端、谷崎の小説を日本語からオランダ語に翻訳しているの、全部読んだ。映画も評判が良くて、卒業試験の後の夏休みにはまる一週間、毎晩自宅からハーグに通って「日本映画フェスティヴァル」で上映する映画を見てきた記憶がある。

一九六六年九月にライデン大学の東方学科に入学した。当時の学科は教授三名、他の教員・助手五、六名、学生数十人だった。教育課程の構成は修士課程三年、博士過程三年というもので、専攻には中国と日本があった。専攻が日本学であっても修士課程では古典中国語（文言）が必修科目で、逆に、中国語が専門なら博士課程の間に現代日本語を習わなければならなかった。朝鮮語は博士課程に入ってから選択科目だった。修士課程で習う日本語は現代語だけだったので、正直に言つて中国語の授業で読む『孟子』や『古文观止』の方がずっと面白かった。三年目にやつと日本語の小説が読めるようになって来るまで、日本語で読ませられているものは愚劣な教科書ばかりだった。「私は郵便箱である」という話を読ませられた時、もう日本語を止めようか、と思うぐらいだった。しかし、現代中国語も同じような教科書（プラス『紅旗』！）だったので、我慢することにした。

日本の古文と漢文は博士課程の科目だったので、日本への留学を挟んで学んだ。ただ、古文の文法だけは、運良く日本に発つ前に習うことができた。留学したのは京都大学で、お世話になった先生は教育学部日本教育史の本山幸彦先生と、本山先生がハーバードへ行っている間、人文科学研究所の島田虔次先生だった。一九七一年の十月から一九七四年の五月まで京都で頑張つて、主に近世思想史を勉強した。初めて本山先生に会ったときに言われたことを一生志

れない。近世思想史のことが研究したいと説明したら、「ほんなら、丸山君の本は読んだやろう」と言われたが、たまたまライデンの蔵書の中にあつた井上哲次郎の書物を齧<sup>かじ</sup>つた程度の筆者には、どの丸山のどの本か、ちつとも分からなかつた。幸い先生の教室の中で陣を張っていたエリソン（George Elison; Jungis Elisonas とも名乗る）というアメリカ人の先輩に救われ、その足で、河原町の丸善に行つて丸山眞男『日本政治思想史研究』を買つた。そして次の数週間をその閲覧に費やしたのだ。

「日本教育史」の研究室の中で机を与えられて毎日大学に通つたので、研究室の仲間と付き合つたりして自然と日本語能力もアップしたし、授業やゼミに出ているうちに段々と日本人が気になるポイントは私が気にするポイントとは違うことに気が付いたのだ。同僚はやはり、明治維新と明治時代を重要と思つていたが、私は却つて興味が湧いてこなかつた。なぜ重要視されるのか、始めは理解に苦労した。変な西洋人が威張りまわるし、変な日本人がそれに負けず威張つており、原典は中国語から英語に変わるのだから、私が求めていた「違う文明の日本」が薄らいでいった。余り優れない時代と思つた。同級生には彼らが直面する日本がその時代にこそ生まれたという意識があつたことは分かつてきたが、共有するのはなかなか困難だつた。

ライデンに戻つてから、博士課程に入り、二年後、メインは日本

学、副専攻として、朝鮮語と東アジアの歴史で卒業した。卒論の一つは江戸時代の儒教に関するもので、もう一つは明末の東林書院に関するものだつた。翻訳も提出しなければならなかつたので、『三酔人経綸問答』の一部を翻訳した。明治時代のテキストではあつたが、中江兆民だけは他の明治時代の人とは違ふと思つた。なお、『問答』の岩波文庫本を訳・校注者の一人である島田先生に頂き、表紙に「ポート学兄恵存」と書いてくださったので、「何が何でも、これを活かしてやらなくちゃ」と思い、翻訳の対象に撰んだ次第である。

さて、この身上話を、なぜするかと言うと、私が日本研究に対して純学問的な関心を抱いて、いかにも「地域研究」というべき教育課程を終えたことを示すためだ。我々は当時、まだ地域研究という言葉の方を使わず、学生同士で、「ライデンの東方学は非常に文献学的だナア」と言い習わしていたが、三人の教授の中の一番若い、チュルヒヤー（Erik Zürcher, 1928-2008）先生だけは時々「言語だけを覚えても学問にはならないから、デイシプリン（*Discipline*）も習わなくちゃならんぞ」と脅してみせた。「デイシプリンって何でしょうか」と尋ねる同僚もいたが、「経済学、歴史」と言われたところで、大抵の学生は肩をすくめて流した。

カリキュラムのなかでは重点が言語に置かれているのは確かだつたが、それでも言語はあくまでも手段であつて言語学ではなかつた。

その外に中国史、日本史、中国文学史などの、概説的な授業があった。三年目あたりに自分の専攻を撰んで、それについて講座内外で授業に出たり、先生を邪魔したり、必要な本を読んだりするのが普通の経路だった。なお、日本または台湾への留学は、好ましくは修士課程を卒業してから、博士課程に入る前にするように進められた。一つは中国語または日本語を喋る術を覚え、一つは文献と実物とを見るために、必要とされていた。

留学を入れて在学年間が八年になる（筆者は十年間かけた）が、それは止むを得ないことだった。予備知識が全くないからだ。オランダ人なら、例えばフランス文学を専攻に撰ぶと、すでに必要な言語（フランス語、ラテン語）を学校で学んでおり、ヨーロッパの歴史にも一応の知識があり、文化的背景（ギリシア・ローマの古代、キリスト教）が共通で、多分、夏休みには何回かフランスで暮らしたりしたこともあるのであろう。こういうわけなら、予備的なことをせずにいきなりフランス文学の専門的な研究に入ることも出来ようが、予備知識も共通性も全くない日本文学なら出来まい。やはり、歴史的背景、社会的コンテキスト、中国語などを学ばないと物にならない。この面から見て地域研究は実用的な手段である。

#### 国際交流と財源

どんな学問も国際的な営みであるのは当然だ。しかし、地域研究の場合には疑心を持つ人もいるだろう。この点で問題になるのは外国人でその地域のことを調べたい人と、元々その地域に生まれ育った人との間に生じる疑心である。筆者は初めて、日本人の比較文化人類学者で、オランダでサンタクロースの児童祭りの研究をしに来た人に出会ったとき、こんな気持ちになった記憶がある。「オランダは歴とした文明国で、未開発な国ではなく、文化人類学者の来て調査すべきところではない。しかも、サンタクロースはとてもオランダ的な祭りなので、日本人に分かるはずはない。しかも、その中心にあるのはプレゼントのやり取りなのに、日本人程プレゼントの下手な人はいないのに分かるはずない」と一瞬思った。勿論、そうは言わなかった。大阪、千里の国立民族学博物館の研究者だったし、ライデン大学との協定があつて同僚が呼んだので、歓迎して「出来ることがあればおつしやつてください」と言った。しかし、一瞬こんな反応を感じたので、外国人に研究される日本人の違和感を少々位置づけることが出来るようになった。それまでは、「これは外国人には分からない」という考え方に出会ったら、なかなか理解できなかった。国粋主義の行き過ぎで、日本人独特の閉鎖主義と思つた。

しかし、そうではない。やはり、人の家に入っては会釈が必要であると同じことで、人の慣れ育った文化に關してもいきなり自分の意見を言つて会釈なく振る舞うのは良くない。しかし、だからと言つて、日本の研究を日本人に、オランダの研究をオランダ人に任せるべきだ、という結論なら、あまりにも閉鎖的な世の中になる。然るべき努力は必要ではあるが、外国人が日本のことが解らないということはありません。

日本研究はまだ歴史が浅い。大抵の国では第二次世界大戦後にしかものにならなかつたが、一八五五年にシーボルトの助手の Hoffman (J. J. Hoffmann, 1805-1878) が日本語と中国語の教授に任命されたのが大学の専攻としての日本学の始まりだ。その後、すでに中国研究の伝統があつたパリで引き継がれ、パジエ (Léon Pajés, 1814-1886) とデ・ロニ (Léon L. Prunoi de Rosny, 1837-1914) が初代の日本学者になつた。ライデン／パリからドイツに広まつた。英国人の日本学者は大陸の研究者と違つて日本に住みついてから日本のことを研究した。その例としてサトウ (E. M. Satow, 1843-1929) アストン (W. G. Aston, 1841-1911) チェンバノン (B. H. Chamberlain, 1850-1935) サンソム (G. B. Sansom, 1883-1965) を挙げることが出来る。チャンバレンは東京大学の教授になつたが、他の三人は外交官として日本に来て日本語などを勉強し始めた。大陸ではむしろ、ラテン語・ギリシア語の構造を真似て大学で中国と日本語を両方、文献から習

いおこすのが普通だつた。卒業してから日本に行くことはあつたが、その場合、外務省の力を借りて特別言語官か何かの肩書で派遣されることが普通だつた。その例が、ライデン大学の二代目の日本学の教授であるデ・フィセル (M. W. de Visser, 1875-1930) と海軍武官として東京のオランダ大使館に任命され、ついでのことに『続日本紀』の研究を始めたスネレン (J. B. Snellen, fl. 1930) である。蘭印総督府が一九一七年に日本語のできる公務員を教育する政策を採用してから、ライデン大学で中国語を勉強してその後蘭印で活躍したファン・デ・スタット (P. A. van de Stadt, 1876-1940) が日本語を学ぶために東京に派遣されて、一九一八年～一九二〇年に東京に滞在した。帰国後、一年間ばかりデ・フィセル教授に師事してからまたバタビアに戻り、新たに設立された総督府日本用事係の顧問を務めた。研究者として、『実用蘭和辞典』(東京、一九二二年)と『日蘭辞典』(台北、一九三四)を編纂した。<sup>(2)</sup> 戦後、日本の奨学金が出来て、日本に行つて研究することはもつと簡単になつた。国際交流基金や各財団がなす仕事を高く評価せねばならない。

しかし、今や本当の共同研究の時代になってきているのだ。その中で、日本の研究機関、殊に京都大学人文科学研究所、国際日本文化研究センター、国立文学研究資料館、国立国語研究所、国立歴史民俗博物館などの特別研究所が重要な役割を演じることが出来る。やはり、例外こそあれ主な専門家と主な資料は日本にあるし、それ

に付き合ったり、それを利用したりする必要がある。世界的規模で日本のことを研究して欲しければ、旅費、滞在費、紹介が必要だ。外国人の学者が日本に行き、日本人の学者が外国に行くことが出来るよう、便宜を図ってもらわなければならない。

学者には、もちろん、こんなことは判っているのだ。問題は最終的に財源を握って予算を決める政治家にある。今の欧米では彼等の目から見て、日本より中国のほうが高くそびえる。日本はもう過ぎ去った過去のように思われ、一時恐れられていたが今や高齢化と長年の不景気に喘いでおり、もう競争相手にはならない、と見なされている。だからと言って研究しなくても良いというのは早合点だが、この早合点を辞さない政治家や官僚がかなりいる。面白いことに、若者の間では日本のことが相変わらず人気である。例えば、ライデン大学の日本学科の新生の数をみれば天安門事件以降、中国学科のそれを上回ってきている。大抵、漫画やアニメに惹かれて登録するのは良いことにして、とにかく、日本語と日本の歴史や文化などを教わる。そもそも日本の現代文化にこんな人気があること自体を評価しなければならぬ。中国にはない。PRや外交ではもつと積極的に利用されるべきだ。

もう一つの問題は政府が人文学部の予算を削減したがることだ。日本でもオランダでもそんな傾向があるから、これも世界的な現象であるらしい。その理屈が良く判らない。互いに下手な英語で通じ

ればいいじゃないか、と言わんばかりの考えらしいが、強く反対しなければならない。この地球で共存していきなければ、互いにその文明を尊敬して、その文化と宗教を真に理解せねばならない。そのために、言葉を覚えて各地で調査や研究をする必要がある。安楽な「現代化論」の流れで、「最早皆我々のごとくなる」と思うのは、妄想としか言えない。お金が掛かるのは掛かるだろうが、自然科学の予算に比べれば、ずっと安くつくはずだ。ロケットを打ち上げて宇宙を研究するよりは中近東の研究に予算を作るほうが、世界の平和に貢献するであろう。ソクラテスがすでに指摘した通り、「星は我々の上であり、我々と関係ない」と。詰まる所、人類の相互理解に必要なのは徹底した地域研究で、日本研究もその枠内に位置づけるべきであろう。

注

- (1) この神父はW・A・グロータース (Willem A. Groenarts, 1911-1999) だった。グロータース『日本の方言地理学のために』(平凡社、一九七六年)を参照。
- (2) ほんの一例だが、日本の封建制を研究すると、中世ヨーロッパのそれと比較しがちで、中国、朝鮮のそれとは全く比較しようとしないうことだ。
- (3) Anouar Abdel-Malek, 1963, *L' Orientalism en Crise*, *Diogenes* 44: 109-42.
- (4) Edward Said, 1978, *Orientalism: Western Conceptions of the Orient*, New York: Pantheon Books.
- (5) おおかた Harriet T. Zumdorfer, 2008, *The Orientation of JESHO's Orient and*



the Problem of 'Orientalism': Some Reflections on the Occasion of JESHO's Fiftieth Anniversary. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 51: 11-12 に依る。  
なお、Zunderfer は上記の文献以外、Alexander Macle, 2000. *Orientalism: A Reader*. Edinburgh: Edinburgh University Press という書物にも依る。

- (6) 同書の序文では著者がアメリカに住んで、開戦後收容所に入れられた人だけに言及するが (Benedict, p. 6: "There were plenty of Japanese in this country who had been reared in Japan and I could ask them about the concrete facts of their own experiences, ... fill in from their descriptions many gaps in our knowledge which as an anthropologist I believed were essential in understanding any culture.")<sup>1)</sup> しかし、例えば第一章を見ると兵隊で捕虜になった日本人も数多く引用される。註が欠けているので、何処でどのようにして入手した情報か、はつきりしない。

- (7) 早く例は Jean Stoezel, 1955. *Without the Chrysanthemum and the Sword: A Study of the Attitude of Youth in Post-War Japan*. London: Heinemann; Paris: Unesco. による。例えば次の批判がある。"It must therefore be a matter of regret that Ruth Benedict not only neglected quantitative techniques ... but also tried to justify this negligence methodologically" (Ibid., p.16). ちなみに、この研究に協力して初めて日本に行けるようになったのは後ほどライデン大学で筆者が師事したフォス (Fits Vos; 1918-2000) 先生だった。

- (8) 同じ反論をシュモルツェン<sup>2)</sup>による。Benjamin I. Schwartz, 1996. *Area Studies as a Critical Discipline*. In: *China and Other Matters*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1996: pp. 98-113 を参照。読者に一読を勧める。

- (9) この考え方の象徴的な産物は「Studies in the Modernization of Japan」という、六〇年代にプリンストン大学から出された、五冊本のシリーズだ。

- (10) 十七世紀なら専門がまだはつきりと分けられていなかった。例えば林羅山と山崎闇斎は漢学と国学、藤原惺窩が漢学と和文学を両方修めていた。十七世紀後半から知識人の間では段々と専門化する過程が表面化する。

- (11) 音楽のことはよく分からないから今は取り上げない。東アジアなら、知識人の伝統的な楽器は琴だったが、果たしてどれだけの日本人にそれが弾けただろうか。その代わり、お能があつて謡曲を歌ったり躍ったり笛を吹いたりする人はかなりいた。ヨーロッパでは楽器の演奏は一般教養には入っていたが、知識人と見なされる条件ではなかった。

- (12) ファン・デ・スタットの略伝は P.N. Kuiper, 2016. *The Early Dutch Sinologists: A Study of their Training in Holland and China and their Functions in the Netherlands Indies (1854-1900)*, PhD dissertation, Leiden, pp. 927-930 を参照。